

松下幸之助記念志財団 研究助成  
研究報告

(MS Word)

## 【氏名】

山岸 哲也

## 【所属】(助成決定時)

首都大学東京大学院(現東京都立大学) 人文科学研究科

## 【研究題目】

共存の「特異点」——インド・シッキム州における宗教実践の検討から

## 【研究の目的】(400字程度)

申請者は、下地としての修士論文にてシンクレティズム概念の再考を行った。そして多数の民族や異なる宗教を信仰する人々の関係性について議論するため、インド・シッキム州におけるシンクレティックな宗教実践と、異なる民族同士の共存の関係性を浮かび上がらせる必要があると考えた。調査地域であるインド・シッキム州は非常に多くの民族が居住しており、宗教実践も民族ごとに多岐に亘るうえ、彼らの宗教実践は非常にシンクレティックな側面を含んでいるという、申請者の研究に適した地域である。このような背景から、異なる民族の共存という点で特異な地域であるシッキムを事例として、当該地域を共存の「特異点」と考えてその状況を明らかにすることで、昨今頻繁に言及される「国際理解・協調」や「多様性」、「多文化共生」といった世界的関心事に、一石を投じることを目的とした。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

当初本研究では、インド・シッキム州におけるシンクレティックな宗教実践を対象とした綿密なフィールドワーク(現地調査)を行うことで、その背後にある多数の民族や異なる宗教を信仰する人々の関係について微細に観察することを主な研究内容としていた。特に調査地域を、複数の宗教の聖地となっていることで、それらの共存の関係や相互の影響が非常に強く表れる地域である南西部 S 地区に設定した。具体的には、「(1) シッキム州全体における宗教実践の全体像を明らかにする」、「(2) S 地区におけるシンクレティックな宗教実践を観察・記録する」、「(3) S 地域における様々な宗教の信仰者や異なる民族の関係性について明らかにする」、「(4) (1)～(3)のデータを基に、『宗教実践と共存の関係性』について析出する」という、4つの研究内容を挙げていた。しかし、2020年から始まった新型コロナウイルス感染症の世界的なパンデミックの影響により、現地に渡航して調査を実施することが不可能となってしまった。そのため、研究の内容と方法を文献研究へと切り替え、研究方法の1つとして挙げていた「(1) シッキム州全体における宗教実践の全体像を明らかにする：シッキムにおける宗教実践についての研究論文やその他歴史的記述(*History of Sikkim*など)、行政文書などの収集を併せて行い、各宗教に関する位置づけを行う」ことを主とすることとした。具体的には、未だ目を通すことができていない当該地域に関する書籍や資料などを、日本国内で可能な限り渉猟することで研究目的・方法の達成に努めた。

## 【結論・考察】(400字程度)

インド・シッキム州における諸宗教について、民族カテゴリーやポリティクスとの密接な結びつきやその歴史的背景の理解を試みた。まず仏教は当該地域で歴史的に重要な地位にあり、人々の多様な実践におけるポリティクスにおいて時に「言説」として用いられ、近年でもその政治的勢力を拡大しつつある。その一方で、土着のシャーマンの実践が衰退しつつも再生の兆しが見られること、キリスト教が村落地域で活動を活性化させることで他宗教と対立的な関係になることなどの事実が確認できた。しかし社会宗教史から見れば、

当該地域では宗教や権力などによって「上から」ローカルな実践が抑圧されることは少なかった。また、権力的な「中心」が存在してこなかったことで、ローカルな単位では混淆的な実践が許容されてきたと考えられる。今後の研究では、村落などローカルな単位において「寛容」というものがどのように生成されているのか、ということに注目することで、当該地域における異なる民族同士の共存をより深く議論できると考えている。